

「片足立ち 20 秒未満」が脳卒中リスクと関連 ～日本の地域住民コホート研究

高齢者では無症候性脳血管病変は脳卒中の強い危険因子である。虚弱な高齢者における姿勢の安定性は無症候性脳血管病変に関連することが示唆されているがエビデンスに乏しい。本研究では姿勢の安定性と無症候性脳血管病変（脳室周囲病変、ラクナ梗塞、微小出血）および認知機能との関連について横断的研究を実施し、検討した。

被験者は 50 歳以上の健康な中高年 1,387 人。姿勢の安定性は開眼片足立ち保持時間の測定と重心動揺計を用いて評価した。無症候性脳血管病変の有無は MRI により評価した。その結果、開眼片足立ち保持時間が 20 秒未満の者の割合は、ラクナ梗塞、微小出血、脳室周囲病変の重症度とともに高くなった。そこで、年齢、性、高血圧などで調整した多変量解析を行ったところ、開眼片足立ち保持時間 20 秒未満とラクナ梗塞および微小出血に有意な関連が認められた（それぞれ $P=0.009$ 、 $P=0.003$ ）が、脳室周囲病変との有意な関連は認められなかった（ $P=0.601$ ）。一方、重心動揺計のパラメータと無症候性脳血管病変との間には有意な関連は認められなかった。また、開眼片足立ち保持時間 20 秒未満は認知機能の低下と有意に関連していた（ $P=0.002$ ）。

したがって、一見健康そうな人においても、姿勢の安定性は脳の早期の病理学的変化と認知機能の低下を予測する因子であることが示唆された。

出典：Stroke. 2015; 46(1):16-22